

公開対談シリーズ第 11 回

NINAGAWA 千の目

まなざし

蜷川幸雄 たつての希望で実現した、作家松井今朝子さんの今回の対談。話題は小説執筆の秘密から歌舞伎界への提言にまで及び、それを聞く蜷川幸雄の真摯な姿が強く印象に残った。

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

蜷川幸雄 × 松井今朝子

作家

歌舞伎の世界から小説の世界へ

蜷川 (以下N) 本日のゲストは直木賞作家の松井今朝子さんです。昔『仲蔵狂乱』という小説を読ませていただき、それ以来の松井さんのファンで、今日はぜひと思ひまして来ていただきました(拍手)。こういう公開対談は初めてですか。

松井 (以下M) 初めてです。

N 緊張しますよね。

M ええ、とても(深呼吸)。

N 小説の『仲蔵狂乱』を一番初めに読ませていただきましたが、あれを調べるのはものすごく大変なことだったのではないかと思います。早稲田大学の演劇学科時代から、そういう歌舞伎俳優や江戸時代の歌舞伎の周辺の問題というのは、興味があって勉強されていたのですか。

M もともと早稲田ではそちらの方を勉強してまして、浄瑠璃や歌舞伎の研究をずっとやっていました。ですからどちらかとい

うと活字の本よりも、昔の写本や版本を読んでいる時間のほうが長かったかなと思うぐらいです。作家になるつもりはほとんどなかったと言ったら怒られてしまいますが、社会人になって最初の勤め先である松竹では歌舞伎の台本作りをしたり、武智鉄二先生について歌舞伎の演出を勉強させて戴いたりして。女性ではまだ珍しかったのですが、歌舞伎の裏方として仕事をしてました。小説を書き出したのは 40 代の半ばですから、本当にこの 10 年ですね。

N 松井さんは新しい歌舞伎あるいはお芝居の戯曲をお書きになるつもりはないのでしょうか。

M 芝居を書くというのはものすごく体力が要りますよね。ある種尋常でない神経も使うし。特に歌舞伎の場合は、現場で作っていくという感じもあるし。それに芝居の場合は役者や他のスタッフが大勢いて、自分が作り上げた世界について自分で責任を持っていない部分ができてくる。その点、小説は下手でも全部私の責任ですと潔く言い切れますので、やっぱり有り難いですね(笑)。